

顕浄土真実教文類一(五)

高田短期大学学長 栗原廣海

一、『平等覚経』の文

『無量寿如来会』に続いて、『平等覚経』の文を引かれます。

仏、阿難に告げたまわく、「世間に優曇鉢樹あり、ただ実ありて華あることなし。天下に仏まします、いまし華の出づるがごとしならくのみ。世間に仏ましますども、甚だ値うことを得ること難し。今われ仏に作りて天下に出でたり。もし大徳ありて、聡明善心にして、仏意を知るに縁りて、もし忘れずは仏辺にありて仏に侍えたてまつらんとなり。もし今問えるところ、普く聴き、あきらかに聴け」と。

二、憬興師『述文賛』の文

次に、新羅の人で法相宗の僧である憬興師の、『無量寿経』への註釈である『無量寿経連義述文賛』から引文されます。

「今日世尊住奇特法」というは、神通輪に依りて現じたまうところの相なり、ただ常に異なるのみに非ず、また等しきものなきがゆえに。「今日世雄住仏所住」というは、普等三昧に住して、よく衆魔雄健天を制するがゆえに。「今日世眼住導師行」というは、五眼を導師の行と名づく、衆生を引導するに過上なきがゆえに。「今日世英住最勝道」というは、仏四智に住したまう、独り秀でたまえること、匹しきことなきがゆえに。「今日天尊行如来徳」というは、すなわち第一義天なり、仏性不空の義をもつてのゆえに。「阿難当知如来正覚」

「世尊は阿難に告げられた。『世の中に優曇華とよばれる樹がある。この樹は、ただ実がなるのみで、花が咲くことはない。今、この世に仏が出現されたという事は、花が咲かない優曇華に花が咲いたようなものである。また、この世に仏がおられても、お会いすることは極めて難しい。しかし今、自分は仏となってこの世に出現しているのである。あなたが大徳をそなえ、聡明で善心をもつていて、仏の心を知ってそれを忘れないならば、それは、仏のお側にあつて仏に仕える者と言うべきであろう。あなたの問うたことに答えるから、すべてを、あきらかに聴きなさい』」

ここには、仏がこの世へ出現されることが希有であり、仏とお会いすることがいかに難しいかということと、仏意を知り、仏法を正しく理解することがいかに重要であるかが説かれていると言うことができるでしょう。

「慧見無碍」というは、すなわち奇特の法なり。「慧見無碍」というは、最勝の道を述するなり。「無能遏絶」というは、すなわち如来の徳なり。以上の『述文賛』の引文から、先に引文された『無量寿経』の経文の中でも、聖人が特にどの所説を重要視されていたかを知ることができます。

三、真実教の讃嘆

最後に、聖人が自らの言葉で真実教を讃嘆して「教文類」の結びとされます。しかればすなわちこれ顕真実教の明証なり。誠にこれ如来興世の正説、奇特最勝の妙典、一乗究竟の極説、速疾円融の金言、十方称讚の誠言、時機純熟の真教なりと。知るべし。

「このようなわけで、以上に挙げた経文は『無量寿経』が真実の教であることをあらわす明らかな証拠である。誠にこの経は、如来が世にお出まし

